

# 排除と包摂

## ーレベッカ・ウォーカーの自伝における ユダヤ・アイデンティティとカラー・ラインの問題ー

本 田 安都子<sup>\*1</sup>

内容要約：本稿では、アメリカ人作家レベッカ・ウォーカーの自伝 *Black White and Jewish: Autobiography of a Shifting Self* (2001) において、どのようなユダヤ・アイデンティティが表現されているのか検討する。また、この自伝に対してどのような批評がなされているのかも併せて考察することによって、現代のアメリカ社会におけるユダヤ・アイデンティティの在り方について、人種関係との関連から考察する。

キーワード：ユダヤ人／人種関係／アイデンティティ／自伝

### 1. はじめに

1960年代、アメリカにおけるユダヤ・アイデンティティについて考察するうえで大変興味深い広告ポスターがニューヨーク市に登場する。それは、ブルックリンのパン屋が出した広告であった。そのパン屋は、1888年に東欧出身のユダヤ移民ヘンリー・S・レーヴィ（Henry S. Levy）によって始められ、ブルックリンでは名の知れた存在であった。その広告ポスターには、次のような文句が載っていた。「ユダヤ人でなくてもレーヴィの本場のジューイッシュ・ライ麦パンが好きになる（“You Don't have to Be Jewish to Love Levy's Real Jewish Rye”）」<sup>1</sup> この宣伝文句と共に、様々な人種やエスニック集団を代表していると思しき人物たち——アイルランド系の男性警察官、ワイシャツにネクタイ姿のアフリカ系アメリカ人の少年、羽飾りのついた帽子をかぶったネイティブ・アメリカンの男性など——が、満面の笑みでレーヴィのライ麦パンを頬張る姿がポスターを飾っている。

この広告が巧みなのは、ユダヤ人の姿を見せることなく、ユダヤ人とはどのような姿をしているのか表そうとしているという点にある。では、この広告の文言で想定されている「ユダヤ人」とは、どのような姿をしているのだろうか。もともと、創業者であるレーヴィが東欧出身のユダヤ人であるゆえ、広告の「ユダヤ人」という文言は、アシュケナジー系ユダヤ人を暗に示していると考えるのが妥当であろう<sup>2</sup>。さらには、アメリカにおけるユダヤ人人口の大半は、当時も現在

---

<sup>\*1</sup> 福井大学教育・人文社会系部門教員養成領域

においてもアシュケナジームであることから<sup>3</sup>、アメリカという文脈においては、「ユダヤ人」＝「アシュケナジーム」という図式が容易に成り立ちうる。しかし、ここで問題なのは、アシュケナジームは数あるユダヤ人集団の一つにすぎず、ユダヤ民族にはスファラディームやミズラヒームなど、その肌の色や文化習俗などにおいて、アシュケナジームとは異なる集団も存在しているということだ<sup>4</sup>。また、それら伝統的な集団区分には分類できないユダヤ人の集団——アフリカ系やアジア系など——も存在する。皮肉なことに、レーヴィの広告は、「ユダヤ人」というアイデンティティをアメリカ社会に向けて高らかに宣言する一方<sup>5</sup>、そこで表現されるユダヤ・アイデンティティは、排他的なものとなっている。

レーヴィの広告は、アメリカにおけるユダヤ・アイデンティティと人種の関係性を考えるうえでも大変興味深い。先にも述べた通り、ユダヤ民族には様々なエスニック集団が存在しており、その肌の色は様々である。よって、誰がユダヤ人であるかどうかは肌の色によって断定できることではない。レーヴィの広告ポスターのひとつでは、黒人少年の写真が「非ユダヤ人」として登場しているのだが、現実には、この少年のような外見の少年もユダヤ人でありうる。しかしながらこの広告は、そのような可能性を排除することによって成り立っているのだ。

メルヴィン・Ｒ・レーベンタール (Melvyn R. Leventhal) は、レーヴィのパン屋の発祥の地ブルックリンで生まれ育ったアシュケナジー系ユダヤ人である。成人して弁護士となった彼は、レーヴィの広告が登場した1960年代、ミシシッピ州で公民権運動に身をささげ中、黒人作家アリス・ウォーカー (Alice Walker) と出会い、1967年にふたりは結婚する。1969年に生まれた一人娘レベッカ・ウォーカー (Rebecca Walker) は、1990年代に第三波フェミニズムの若き旗手として注目され、2001年に自伝 *Black White and Jewish: Autobiography of a Shifting Self* を出版している。

ウォーカーの自伝は、レーヴィの広告ポスターが表現するユダヤ・アイデンティティへの挑戦と葛藤の書といえる。題名の「ブラック」「ホワイト」「ジューイッシュ」の間には、意図的にカンマをつけなかったとウォーカーはインタビューの中で語っている。英語の表記法では、これらの形容詞の間にはカンマをつけることが慣例であるため、「カンマを取るために(出版社と)ひと悶着あった」が、「それぞれの単語は、私の中でひとつに混ざり合っている」ゆえの選択であったと述べている (Bolton-Fasman)。このように、成人したウォーカーは、レーヴィの広告で暗示される社会の「常識」から適切な距離を置き、自分が何者なのか冷静に語ることができているが、自伝の中の若き日のウォーカーにはそのような余裕もなく、そこでは「常識」に振り回される姿が生々しく描かれている。イエール大学在学中、酒に酔った「ワスプのような見た目のユダヤ人学生」(25) が、ウォーカーに向かって次のように言い放つ。「あんた本当にブラックでジューイッシュなのか?」「そんなのありえるのかよ」(25)。怒りに震えながらその学生を追い払った後、ウォーカーは自問する。「私ってありえるの?」

ウォーカーの自伝を特徴づけるのは、自己を規定する属性をすべて併存させようとする点にあ

る。それらの属性の中には、「黒人」と「ユダヤ人」のように、共存しえないと社会通念上信じられているものもある。では、ウォーカーはこの自伝の中で、自らの黒人性とユダヤ性をどのように共存しうるものとして描いているのだろうか。これが、本稿で明らかにしたい第一の論点である。それと共に検討したいのは、ユダヤ系の批評家たちがウォーカーの自伝をどのように評価しているのだろうか、という問題である。この二つの問いを明らかにすることを通して、現在のアメリカ社会におけるユダヤ・アイデンティティについて、アメリカの人種関係との関連から考察する。

## 2. 「私たち」の境界線

ウォーカーの自伝 *Black White Jewish* では、彼女の誕生から高校卒業時までの記憶が綴られ、公民権運動活動家であった両親の離婚や、自身の複数の人種的ルーツによる混乱、そして、そこから生じる身の回りの人々との心理的軋轢などが記録されている。公民権運動期におけるユダヤ系とアフリカ系コミュニティの「蜜月」を象徴するかのような両親の婚姻関係は、1976年に終わりを告げ、ウォーカーは、西海岸と東海岸に分かれて住むそれぞれの親の家を数年ごとに移り住む生活を高校卒業まで続けることとなる。

自伝の終わり近くで、高校3年生の時に父親の苗字であるレーベンタールから母の苗字に変更したときのエピソードが語られる。父は娘の決断に対し、反ユダヤ主義的、つまり、ユダヤ人のルーツを否定する行為だとして怒りをあらわにする。語り手であるウォーカーは、当時の決断の理由について、「ユダヤ人になったとされるもの、つまりホワイテネスには近さを感じず、白くない肌で生きた経験から、ブラックネスには近さを感じるから」(313)と述べている<sup>6</sup>。

この文言だけを切り取れば、これは、ウォーカーが自身のルーツの複数性を否定し、黒人としてのアイデンティティを選び取ったエピソードと映るかもしれないが、自伝のタイトルに端的に表れているように、ウォーカーは自伝全体を通して、複数のアイデンティティが自身を形作るのだという考え方を提示している。例えば、白人と黒人のミックスド・レイスの娘を育てる若い黒人女性から、人種アイデンティティについて娘にどう説明したらいいのか、という相談をされた際の出来事が語られている。世間は娘のことを黒人としか見なさないのに、わざわざ白人のルーツも持っていることを教える必要があるのかと問うその若い母親に対し、ウォーカーは「ありのままを伝えてください」(292)と答える。また、自伝出版後に行われたインタビューでは、自身のアイデンティティに悩む子供時代について、次のようにウォーカーは語っている。「子供時代に変な感じと覚えるのは、いつもどちらかを選ばされるということでした。ただ黒人でいなさい、あるいは、ただユダヤ人でいなさい、などというように。大人になって、自分のすべての属性と折り合いをつけ、私はそれらすべてから成り立っているのだと思うようになりました」("Rebecca Walker")。

興味深いことに、ユダヤ系の書評者の間で、この自伝の中で描かれるユダヤ・アイデンティ

ティに対する評価は大きく分かれている。自らもブラック・ジューイッシュであるシャハナ・マッキニー（Shahanna McKinney）は、「黒人」と「ユダヤ人」というアイデンティティを同時に存在しうるものとして描こうとしたウォーカーの試みを肯定的に受け止めている。マッキニーは特に、自伝のタイトルを *Black White Jewish* としたことを「価値転覆的行為」（116）として高く評価する。なぜなら、これら三つを並列的に並べることにより、様々な社会通念——「一滴」でも黒人の血を有する者は黒人だ、ユダヤ人の女性から生まれた者はユダヤ人だ、ミックスド・ルーツの者はどれか一つのルーツを選ばなければならない、などという考え方——に疑義を突き付けているからだと説明している。加えて、自分に似た人物の物語が語られたことによって、自分自身の存在が正当化されたと感じたとも述べている。

マッキニーとは対照的に、シャーロット・ホニグマン＝スミス（Charlotte Honigman-Smith）は、ウォーカーの描くユダヤ人象に対して大きな不満を抱いている。ホニグマン＝スミスは、「ウォーカーが自伝の後半で描くユダヤ人の姿は、吟味されておらず、その描写は無責任であり、ほとんど漫画のような紋切り型である」と痛烈に批判する。彼女が言及する「自伝の後半のユダヤ人」とは、アシュケナジー系ユダヤ人コミュニティのことを指しており、自らもアシュケナジー系であるホニグマン＝スミスは、この自伝が、ユダヤ人は物質主義的で体制順応的、且つ、富裕層に属するという紋切り型を繰り返していることに怒りを覚えるとまで述べている<sup>7</sup>。

マッキニーとホニグマン＝スミスの評価の違いは、ユダヤ・アイデンティティに関わる問題と深く関連している。つまり、この二人の書評者の間で、「ユダヤ人とは誰のことなのか」という問題に対する理解の枠組みが大きく異なっているのだ。マッキニーは、ブラック・ジューイッシュについては、メディア上ではほとんど取り上げられず、黒人でありユダヤ人である当事者たちも「ユダヤ人」として表に出ることは稀であるという状況を鑑み<sup>8</sup>、ウォーカーの自伝の登場を歓迎している。他方、ホニグマン＝スミスは、ユダヤ人としてのウォーカーのアイデンティティの物語には注目せず、自伝の中のアシュケナジー系ユダヤ・コミュニティの描写の是非を論じることに終始している。ウォーカーの自伝が及ぼす「悪」影響を心配して、書評の締めくくりで「ユダヤ人女性」に向かって次のような「警告」を発している。

この本は、女性学やエスニック・スタディーズの教室で広く読まれることだろう。この本は、自身が抱くユダヤ人への偏見が間違っていなかった、なぜならレベッカ・ウォーカー（彼女自身がユダヤ人だ）のお墨付きをもらったからだ、と感じる女性たちによって読まれることだろう。この本は、文化的アイコンによる無責任な反ユダヤ主義的紋切り型に抗して、自分たちの文化や言語、経験を守らなければならないユダヤ人女性たちによって読まれることだろう。もしこの本が、第三波フェミニズムの声であるというのなら、若きユダヤ人女性たちは用心した方がよい。私たちはここでは歓迎されていない。（Honigman-Smith）

この引用の中でホニグマン＝スミスが繰り返す「ユダヤ人女性」が誰を指すのかは、彼女の書評の文脈からも明らかである。アシュケナジー系ユダヤ人の女性たちだ。確かに、ホニグマン＝スミスはウォーカーのことをユダヤ人と呼んではいるが、「私たち」の中に含まれるべきユダヤ人の仲間としては認識されていない。

マッキニーとホニグマン＝スミスの書評を並べて分かることは、彼女たちそれぞれが関心を寄せる「ユダヤ人」の肌の色が異なるということだ。マッキニーは、有色人種のユダヤ人としてのウォーカーに関心を寄せはするが、アシュケナジー系ユダヤ人の描写については等閑視している。他方、ホニグマン＝スミスは、先に述べたように、アシュケナジー系ユダヤ人の描写については敏感に反応するものの、ウォーカーのアイデンティティ形成の物語については全くと言っていいほど書評の中で触れていない。両者は共にユダヤ人であり、ユダヤ人に関する問題への関心も高い。しかしながら、ホニグマン＝スミスの言葉遣いを借りれば、このふたりの書評者にとっての「私たち」の境界線はカラー・ラインに沿って引かれ、それぞれの「私たち」が重なることはない。包摂的なユダヤ・アイデンティティを提示しようとしたウォーカーの自伝が、書評という場を通して人種的分断を呼び起こしてしまっているということは、皮肉なことと言わざるを得ない。

### 3. ブラックネスとの距離

ホニグマン＝スミスは、ウォーカーが「ユダヤ人がなったとされるもの、つまりホワイトネス」(313)に繋がりを感じないから改名をしたと述べたことに触れ、ウォーカーにはどんな権利があって「ユダヤ人がなったとされるもの」を語れるのか、自伝を読んでも一向にわからないと手厳しく非難している。表面的なアシュケナジー系コミュニティの描写しかできないウォーカーは、このコミュニティの部外者に違いなく、よって、彼女には上段から語る資格はないとホニグマン＝スミスは言いたいのだろう。ホニグマン＝スミスの批判の是非はともかく、その批判の背後には、「私たち」と「そうでない者」を分けて扱おうとする排他的態度が潜んでいる。興味深いことに、ウォーカーのアイデンティティ形成の物語の根底には、「私たち」の一員になれないという疎外感が常に存在している。では、そのような疎外感は、ウォーカーのアイデンティティ形成とどのように関わっているのだろうか。

まず、この節では、ウォーカーとブラックネスの関係性について明らかにしていく。高校時代に父の苗字から母の苗字に変更した際、ウォーカーは、それぞれの苗字が象徴するもの、つまり、ブラックネスとホワイトネスへの「近さ」の違いを決断理由として挙げている。一見すると、黒人としてのアイデンティティ表明とも見える苗字変更のエピソードは、もうひとつ別のエピソードを参照することによって、彼女が感じるブラックネスへの近さとは、留保がついたものであることが分かる。

そのエピソードは、成人したウォーカーと彼女の黒人の恋人の会話から構成されている。人種



アイデンティティについて語り合ううちに、話題は、ウォーカーと黒人コミュニティとの関係に及ぶ。恋人はウォーカーに、黒人を自分の同胞と思うかと尋ねる。それに対しウォーカーは、自分がどう思うかより相手がどう自分を見るか、という話から始める。自身の複数ルーツゆえ、相手が誰であろうとも、彼らが自分のことを同胞と呼ぶには邪魔になる要素が自分にはあるのだと述べる (306)。

ウォーカーがそのような感覚を体験した例として、幼い頃、南部に住む母方のおじが自分に対して、「クラッカー (cracker)」(84) という言葉を使ったエピソードが挙げられる。おじや従兄弟達とふざけて遊んでいる中、狂ったようにいつまでも笑い転げるウォーカーを見ておじは、冗談めかして「クラッカー」みたいになったな、と言う。その言葉が白人への蔑称であることを知らなかったウォーカーは、この言葉を聞いてニヤニヤする従兄弟やおじの姿にただ困惑する。大人になったウォーカーは、この言葉が「黒人が白人に使う言葉で、人種差別主義者の白人の狂気や残酷さ、偏執狂的文化」(84) を意味することを知り、さらに、おじや従兄弟がその後も、彼らから見て「黒人らしくない」彼女の行動を指して、軽口のようにこの言葉を使い続けたという体験を振り返り、「おじたちと一緒にの場所にいても、自分の居場所を探そうと、自分が本当にいるべき場所がどこなのか見つけようと必死になっている。おじや従兄弟を愛する気持ちと、自分が彼らに痛みの記憶を呼び起こす存在であるという事実と、どう折り合いをつければいいのだろうか」(85) というように、当時の葛藤を描写している。

ジーノ・マイケル・ペレグリーニ (Gino Michael Pellegrini) は、複数の人種的ルーツを持つ者たちは、人種アイデンティティは単一であるという周囲の思い込みに同調して、自身のルーツの一部を否定する傾向にあることを指摘している (6-7)。この「クラッカー」のエピソードは、単一人種幻想に基づく周囲の期待に沿えず、自身を常に否定されるべき存在として捉えるウォーカーの思考の傾向を端的に表す事例と言える。

また、そのような思考の傾向ゆえに、本来であれば輝かしいはずの一族の歴史の中にも、否定的な自己像を見出してしまうという事例が、母アリス・ウォーカーとのエピソードの中で語られる。ある日、母アリスは娘を自分の書斎に連れていき、壁に掛けられた年老いた女性の写真を見るよう促す。ウォーカーにはそれが誰だか分からないが、これが誰なのか分かっていなければならないという無言のプレッシャーを母から感じる。この女性が元奴隷の先祖であることを母から伝えられても、自分との繋がりを感ぜられず途方にくれる。後にウォーカーは、幼き日の自分が、その老女と偶然道端で出会う場面を想像してみるものの、この時も、他者のまなざしから否定されるべき自己の一部を肥大化させた自己像を描いてしまう。

どこの誰だか分からない子供として、突然にプールおばあちゃんの所に歩み寄っても、おばあちゃんは私にやさしく接してくれるかもしれない。大丈夫かい、と私を気遣ってくれるかもしれない。でも、私の肌の色に危険の兆候、残虐性の証拠を見出さないだろうか。自己防

衛の本能が働き、心のどこかで私を拒絶しないだろうか。(85)

これらの母方の親戚とのエピソードが示唆するのは、ウォーカーがブラックネスに近さを感じるといった時、それは必ずしも血縁を担保とした繋がりではない、という可能性である。むしろウォーカーが自伝の中で繰り返し語るのは、そのような血の一体感ともいえるものを否定され続けたという子供時代の記憶である。ウォーカーにとって、ブラックネスとは生来の本質的属性ではないのだ<sup>9</sup>。ゆえに、「白くない肌で生きた経験から、ブラックネスには近さを感じる」(313)というように、肌の色そのものではなく、褐色の肌ゆえに社会で受けてきた差別の体験が自身の「ブラック」としてのアイデンティティを形作ったとウォーカーは述べているのだ。次節では、この「経験を通じたアイデンティティ形成」というものが、ウォーカーのユダヤ人としてのアイデンティティ形成とどのように関わっているのか見ていく。

#### 4. ユダヤ性と社会正義

ミックスド・レイスの子供としての体験は、ウォーカーに血の繋がりによる無条件の帰属意識というものが幻想であるという思いを植え付け、彼女の否定的な自己像を増幅させる。その否定的な自己像を生み出した根源的な原因として、ウォーカーは、両親の離婚、特に父親の「変節」について語る。

ウォーカーは、離婚した両親と自身の境遇を比較して、自らの寄る辺のなさについて語っている。離婚により、幼いウォーカーは両親の間を行ったり来たりする生活を強いられる一方、両親はそれぞれの「あるべき人生」(116)に落ち着く。つまり、父はニューヨーク時代の幼馴染のユダヤ人女性と再婚し、母はアトランタの大学時代の黒人の恋人とよりを戻す。「両親は、懐かしく、安全で、慣れ親しんだ場所に戻る一方、私はそれらからお別れしなければならない」(116)というように、ウォーカーは両親の離婚のせいで、自分と親の人生が真逆の方向に進んでいったことを強調する。

それでは、ウォーカーの「懐かしく、安全で、慣れ親しんだ場所」(116)とは何かというと、それは、両親が離婚する前に存在していた、異人種間結婚によって作られた家庭である。自伝の冒頭でウォーカーは、自身の出自をアフリカ系アメリカ文学に登場する「悲劇のムラート」(12)に重ねながら、その意味するところを巧妙にずらしていくことにより、複数のルーツを持って生まれたことの意味を肯定的に描こうと試みる。

まず、父から聞いた話として、出生時のエピソードが語られる。出生証明書の両親の人種のチェックボックスには、それぞれ「黒人」と「白人」の欄に印がつけられ、余白には、おそらくは看護師の手による「間違っていない？」(12)という走り書きが記されている。その問いの意図をウォーカーは次のように解釈する。「このカップルは、この結婚は、そして何よりもこの子供は間違っていないのか？」(12)

しかしながら、ウォーカーは、両親が共に社会正義の実現に情熱を傾けた活動家であること、そして二人が恋に落ち、その結果として自分が生まれた事実をもってして、ミックスド・レイスの子どもに対するそのような世間の否定的なまなざしに抵抗しようとする。ここで注目したいのが、活動家時代の父親についての記述である。ウォーカーは、「父はリベラルなユダヤ人で、正義や平等、自由などといった抽象的なことでも、迅速で瑕疵のない法の執行により実現されると信じている」(23)と述べている。先の、出生証明書のエピソードでは単に「白人」とだけ認識されていた父は、ここでは差別撲滅に燃えるユダヤ人として描写される。そして、奴隷制を描いた文学作品に登場する「悲劇のムラート」の父親と自身の父親の違いに触れることにより、ウォーカーは、自身が「悲劇のムラート」であることを否定する。「私は私生児ではない、レイプの産物でもない、白い悪魔の子供でもない。私は、ムーブメントの子供だ。私は悲劇的ではない」(24)。ウォーカーは、人種間平等の実現に向けて活動をしていた時代の父を語ることにより、(アシュケナジー系)ユダヤ人である父を、人種差別的な社会構造の受益者である白人とは異なる白人として描いているのだ。ウォーカーは、その肌の色から得られる特権的地位に安住することを選ばず、人種間の不平等と闘おうとした父の子どもとして自身を描くことにより、自らの存在を肯定しようとしていることが「悲劇のムラート」をめぐる記述から読み取れる。

以上を踏まえると、ウォーカーが「ユダヤ人がなったとされるもの、つまりホワイテネス」(313)とは距離を感じているから母の苗字を選んだのは、単純に、その肌の色ゆえに父方の家系との断絶を望んで行なった行為ではないと推察される。先に触れた「悲劇のムラート」であることを否定する際のウォーカーの語り口からも明らかなように、アリス・ウォーカーと結婚し、レベッカと三人で家族生活を送っていた頃の父は、「悲劇のムラート」の物語に登場するような白人とは違う存在として描かれている。ここでの父は、いうなれば、「白い」肌に付随する特権の受益者になる前のユダヤ人であると言える。そのように理解すれば、ウォーカーが改名の際に否定したのは、必ずしもユダヤ的ルーツではないことは明らかであろう。

父は、ユダヤ人の女性と再婚したのち、しばらくはワシントン D.C. やニューヨーク市などを転々とするが、後にニューヨーク市郊外に居を構えることとなる。はじめは継母に懐いていたウォーカーは、父の一家が郊外に移り住んだのをきっかけとして、継母を敵対視するようになる。それは、ウォーカーが継母のことを、父を公民権運動の時代の情熱から引き離し、中産階級の白人に仕立て上げた首謀者と見なしているためである。ウォーカーは、父をめぐる自身と継母の綱引きを、まるで人種間の争いであるかのように描写している。「彼女と私は、父の魂をめぐる争っているのだと思う。私は自分の茶色い体を武器に、父のより肉感的で公正な過去の記憶を呼び覚まそうとし、彼女は、私が知らない父の白いユダヤ的ルーツの表面の汚れをこそげ落とそうとするのだ」(206-7)。

ウォーカーが、父を「白い」郊外生活から引き離し、人種間共闘を掲げていた公民権運動の時代に引き戻そうとする背景には、自身のミックスド・レイス・アイデンティティを肯定してほし



いという思いがあったのだと考えられる。ウォーカーは、「変節」する前の父が自分にかけてくれたであろう言葉を次のように夢想する。「継母さえいなければ、父は今でも私のものだったろうし、私の話を聞いてくれ、そのままの自分を誇りに思いなさい、お前が生まれたのは必然だったんだよ、黒人であり白人であることは、たった一つでしかないことよりもいいことなんだよ、文句を言うやつらはほっとけばいい、と言ってくれたことだろう」(218-19)。このような父への期待の背後には、その肌の色にもかかわらず、人種差別に立ち向かおうとするような二重性を持つ父であれば、自分の二重性も理解してくれるはずだ、という思いがウォーカーにはあったのだと推察される。

黒人コミュニティーに同胞意識を抱くかどうか、という話を恋人とした後、ウォーカーは、「それが何を意味するかはさておき、同胞であろうとなかろうと、自分が直ちに近さを感じるの、抑圧されている人々」(306)と述べている。自らの出自が、肌の色の違いを乗り越えて公正な社会の実現に情熱をささげた理想主義者の愛の産物である、つまり、自分は「ムーブメントの子供」(24)なのだという自意識を持つウォーカーにとって、社会正義への情熱こそ、己を最も肯定的にとらえられる自己理解の枠組みであるのかもしれない。また、社会的不平等への関心は、父のように「白く」なってしまったユダヤ人が過去に置き去りにしてきたユダヤ的伝統とも言え、ウォーカーは、それを引き継ぐことで自身のユダヤ的ルーツを主張しようとしているとも考えられるだろう。

さらには、ユダヤ人が「白く」なる前のユダヤ系とアフリカ系の共闘の歴史の産物として自身を「ムーブメントの子供」(24)と呼ぶウォーカーが、現在是对立している二つの集団<sup>10</sup>の懸け橋になろうとする意図もここではくみ取れる。「抑圧されている人々」(306)への共感について述べた後、様々に異なる差別体験をしてきた人々——ユダヤ人、日系アメリカ人、アメリカ先住民——について触れ、次のように自身に問いかける。「私に関して私の先祖が愛しているのは、私を含めた迫害されている人々への共感を総動員できる力であると望むか」(307)。それに対し、ウォーカーは「はい」と答える。この「先祖」とは、誰を指しているのだろうか。ウォーカーの改名の理由から、その肌の色を受け継いだ母方の先祖がまず考えられる。しかし、その繋がりは血統ではなく、白くない肌でアメリカ社会を生きた経験によるもの、つまり、肌の色による経験の共有によるものだ。また、「白く」なる前のユダヤ人とのつながりを、社会正義実現への情熱という観点から見出そうとするウォーカーにとって、父方の先祖もここに含まれると考えてもいいだろう。いずれの場合においても、血による繋がりではなく、経験による繋がりを軸にしている点が、ウォーカーのアイデンティティ形成の特徴と言える。

## 5. むすび

本稿では、レベッカ・ウォーカーの自伝で描かれるユダヤ・アイデンティティの形成について検討した。「黒人」と「ユダヤ人」など、アメリカ社会の「常識」では共存しえないと思われてい

るアイデンティティも含め、すべての属性が自らを形作るとする姿勢が、ウォーカーのアイデンティティの在り方の基調となっている。彼女が自伝でこの問題を取り上げたということは、従来のアメリカ社会では不可視の存在となっていた有色人種のユダヤ人を可視化したという点で、評価すべき挑戦であると言える。

ウォーカーのアイデンティティ形成の鍵となるのは、血縁ではなく経験であることも明らかとなった。彼女がそのように自らのアイデンティティを捉えるようになった背景には、肌の色による差別の経験があったことを自伝の記述から確認した。血統に基づいた本質的アイデンティティではなく、経験を通じたアイデンティティ形成は、例えば、肌の色の異なる者同士の連帯の可能性も示唆するという意味で、排他性よりは包摂性を求める——つまり、自身の中のどれか一つのアイデンティティを優先するのではなく、あらゆるアイデンティティを肯定する——というアイデンティティ形成におけるウォーカーの基本的態度とも整合性を示している。また、被差別者との繋がりをアイデンティティの中心に据えることは、かつて父が実践していた社会正義を通したユダヤ性の表現とも通底している。その意味において、ウォーカーのユダヤ・アイデンティティも、血縁ではなく経験をもとに形成されていることが分かった。

しかしながら、複数のアイデンティティを共存させようというウォーカーの意図とは裏腹に、彼女の自伝への評価がカラー・ラインによって分断されているという現象も見られた。この現象は、アメリカにおけるユダヤ・アイデンティティを考察する際、人種問題を無視することは出来ないということを示唆している。この点に関連して、ロリ・ハリソン＝カハーン (Lori Harrison=Kahan) は、ウォーカーの提示する、被差別の体験を介した連帯という考え方にも、ある種の排他性が潜んでいるのではないかと指摘している。つまり、ウォーカーにとってアンネ・フランクは「望ましい」ユダヤ性を象徴する一方、20世紀後半のアメリカに住む（アシュケナジー系）ユダヤ人を、彼女はその富と社会的地位ゆえに「望ましくない」ユダヤ性の持ち主と見なしているのではないかとハリソン＝カハーンは述べているのだ (239-40)。この指摘は、とても重要である。なぜなら、被差別経験をもとにしたアイデンティティ形成や連帯は、アメリカという文脈においては、容易にカラー・ラインによる分断を招いてしまう危険性も孕んでいるからだ。ウォーカーの自伝に対する対照的な評価が、その一例ではないだろうか。

レーヴィの広告が登場した1960年代に比べ、アメリカのユダヤ・アイデンティティは、より排他的になったのだろうか。それともより包摂的になったのだろうか。少なくとも、レベッカ・ウォーカーの自伝は、アシュケナジー系ユダヤ人とは異なる立場のユダヤ人の声を世間に届けたという意味で、より包摂的なユダヤ・アイデンティティの模索へと大きな舵を切る契機の一つとなったのではないだろうか。しかし、その先に待ち受けるカラー・ラインの問題は、決して避けて通ることのできない難題であると言えるだろう。

## 注

本稿は、第38回日本アメリカ文学会中部支部大会シンポジウム「文学にみる Mixed Race」での発表原稿「移動する“Movement Child”——Rebecca Walkerの自伝におけるmixed-race identityとBlack-Jewish relations」をもとに大幅な加筆・修正を施したものである。

<sup>1</sup> 本稿における引用の和訳はすべて拙訳である。

<sup>2</sup> レーヴィのパン屋で売られていたライ麦パンや黒パンは、彼の故郷である東欧でよく食されていた種類のパンである。ゆえに、「アシュケナジー系ユダヤのパン」と呼ぶのがより正確であろう。中東や北アフリカ地域であればビタブレッド、エチオピアであればフラットブレッドというように、ルーツとなる地域によって「ユダヤのパン」の種類は異なる (Brettschneider 41)。

<sup>3</sup> ピュー研究所が18歳以上のアメリカ在住のユダヤ人を対象として行った調査 (2019年11月19日から2020年6月3日に実施、回答者数4,718名) によれば、人種に関する質問において、回答者の92%が白人であると答え、残りの8%がそれ以外と回答した (“Jewish Americans in 2020”)。

<sup>4</sup> 白杵陽は、世界各地からユダヤ人が集まる国であるイスラエルは、その文化的多様性から「文化の博物館」且つ「言語の博物館」と呼ばれていると述べている (ii)。また、そこに居住するユダヤ人の外見の多様性ゆえに、イスラエルが「人種の坩堝」と称されていることも紹介している (2)。

<sup>5</sup> 広告のライ麦パンは、もともとは「レーヴィの本場のライ麦パン」と呼ばれていたのだが、このポスターを作製した広告会社は、あえて「レーヴィの本場のジュイッシュ・ライ麦パン」と記載した。広告の依頼主であるレーヴィ側は、反ユダヤ主義的反応を恐れて商品名に「ユダヤ」の要素を入れることを嫌がっていたのだが、幸いにもレーヴィの心配は杞憂に終わった (Ferretti)。広告文の「ユダヤ」の文言をめぐるレーヴィ側の葛藤から、この時代はまだ、アメリカのユダヤ人が「ユダヤ」というアイデンティティを表に出すことに躊躇するような時期であったことが窺える。同時に、この宣伝の成功は、ユダヤ人がアメリカ社会に包摂されるために、ユダヤ人であることを隠す必要がなくなった時代となったことも示唆している。

<sup>6</sup> 「ユダヤ人がなったとされるもの、つまりホワイトネス」(313) という表現は、1990年代から盛んになった (アシュケナジー系) ユダヤ人の「白人化」に関する研究を意識したものと推察される。ウォーカーが自伝を執筆していた1990年代後半には、この研究分野の第一人者のひとりであるカレン・ブロードキン (Karen Brodtkin) の *How Jews Became White Folks and What That Says About Race in America* が出版されている。

<sup>7</sup> ウォーカーによるアシュケナジー系ユダヤ人の描き方が一面的である点は、ホニグマン＝スミス以外の書評家や研究者によっても指摘されている。例としては、Lester, Meyers 132-137を参照。

<sup>8</sup> 2000年代に入ってから、少しずつではあるが、自身のユダヤ人としてのルーツを表に出すブラック・ジュイッシュの有名人も登場するようになった。例えば、アシュケナジー系ユダヤ人の母と黒人の父を持つカナダ出身のミュージシャンであるドレイク (Drake) は、2014年に『サタデー・ナイト・ライブ』において、自身のバル・ミツバを題材にした寸劇を披露している (“Monologue: Drake's Bar Mitzvah – SNL”)。

<sup>9</sup> フージェン・チェン (Fu-Jen Chen) は、ウォーカーは自身の人種アイデンティティを語る際には社会構築的な枠組みを使って語る一方、彼女の母親や親せきなど「純粋」な黒人たちの人種アイデンティティに関しては本質主義的な捉え方をし、彼らの人種アイデンティティの構築性や複雑性に目を向けられていないことを指摘している (384-86)。

<sup>10</sup> アメリカの反差別運動におけるユダヤ人と黒人の共闘の歴史は、第二次世界大戦以前にまで遡るが、1960年代後半以降、両者の関係は人種間対立の様相を呈していく。シェリル・グリーンバーグ (Cheryl Greenberg) は、1970年代のアファーマティブ・アクション裁判をめぐる、アフリカ系の団体はアファーマティブ・アクションに賛成、ユダヤ系の団体は反対と、正反対の立場を表明したことにより、世間に両者の溝の深さを印象付けることになったと述べている (72-75)。

## 参考文献

- Bolton-Fasman, Judith. "Translating between Two Worlds: An Interview with Rebecca Walker." *18 DOORS*, [https://18doors.org/translating\\_between\\_two\\_worlds\\_an\\_interview\\_with\\_rebecca\\_walker](https://18doors.org/translating_between_two_worlds_an_interview_with_rebecca_walker).
- Brettschneider, Marla. *The Family Flamboyant: Race Politics, Queer Families, Jewish Lives*. SUNY P, 2012.
- Brodtkin, Karen. *How Jews Became White Folks and What That Says about Race in America*. Rutgers UP, 1998.
- Chen, Fu-Jen. "Postmodern Hybridity and Performing Identity in Gish Jen and Rebecca Walker." *Critique: Studies in Contemporary Fiction*, vol. 50, no. 4, 2009, pp. 377-400.
- Ferretti, Fred. "Levy's Jewish Rye Will Soon Be Arnold's." *The New York Times*, 6 June, 1979, <https://www.nytimes.com/1979/06/06/archives/levys-jewish-rye-will-soon-be-arnolds-you-dont-have-to-be-jewish.html/>.
- Greenberg, Cheryl. "Pluralism and Its Discontents: The Case of Blacks and Jews." *Insider/Outsider: American Jews and Multiculturalism*. edited by David Biale, et al., U of California P, 1998, pp. 55-87.
- Harrison-Kahan, Lori. "Passing for Black, White, and Jewish: Mixed-Race Identity in Rebecca Walker and Danzy Senna." Julie Cary Nerad, ed. *Passing Interest: Racial Passing in US Novels, Memoirs, Television, and Film, 1990-2010*. SUNY P, 2014. pp. 229-253.
- Honigman-Smith, Charlotte. "Portrayed, or Betrayed?" Review of *Black White and Jewish: Autobiography of a Shifting Self*. *Lilith Magazine*, June 14, 2001, <https://lilith.org/articles/portrayed-or-betrayed>.
- "Jewish Americans in 2020." Pew Research Center, 11 May, 2021, <https://www.pewresearch.org/religion/2021/05/11/jewish-americans-in-2020/#fn-34764-1>.
- Lester, Julius. Review of *Black White and Jewish: Autobiography of a Shifting Self*. *Shofar: An Interdisciplinary Journal of Jewish Studies*, vol. 22, no. 1, 2003, pp. 136-37.
- McKinney, Shahanna. Review of *Black White and Jewish: Autobiography of a Shifting Self*. *Bridges*, vol. 9, no. 1, 2001, pp. 114-16.
- Meyers, Helene. *Identity Papers: Contemporary Narratives of American Jewishness*. SUNY P, 2011.
- "Monologue: Drake's Bar Mitzvah – SNL." *YouTube*, uploaded by Saturday Night Live, 20 Jan., 2014, [https://www.youtube.com/watch?v=BEyRg\\_T3ae8](https://www.youtube.com/watch?v=BEyRg_T3ae8).
- Pellegrini, Gino Michael. "Creating Multiracial Identities in the Work of Rebecca Walker and Kip Fulbeck: A Collective Critique of American Liberal Multiculturalism." *Multi-Ethnic Literature of the United States*, vol. 38, no.4, 2013, pp. 171-190.
- "Rebecca Walker" *Charlie Rose*, 1 March, 2021, <https://charlierose.com/videos/28992>.
- Walker, Rebecca. *Black White and Jewish: Autobiography of a Shifting Self*. Riverhead, 2002.
- 白杵陽. 『イスラエル』 岩波書店、2009.